

自行隊解体!
入管体制粉碎!

政治委員会
1970. 11. 25
創刊号

水虫の末裔

発行

政治研究部協議委員会
(サ連協残骸派)

7.15 堂死会学生大会に起きた混乱はサ連協を
運動を堅持した者は「小島一派は追放と云う宣言をもって再び現われ、現われたかと思つたらいつのまにか消えこいつた。
昨年來明治大学の中にユニークな運動を展開してきたサ連協はその閉鎖性を批判され、自らその閉鎖性を打破しようと学生
大会に挑み混乱を残して解体していったのである。我々の提出しようとしているこの雑誌紙の内容はそのことの総括を限界
性を尋ねつつも試み、更には現在の学苑会運動を担いつつある学友諸君への提言である、批判の対象となれば幸いである。

大衆運動の過渡期的状況を自らの思想として取らえ返し
当局の学苑会分断策動に自己の存在把握 → 仕人逐行をも
って答える!!

政治研究部協議委員会 (サ連協残骸派)

6月11日に起きた文部省へのFLのテロ行為は、ノンセクト大衆の即時の反応を促進し、学苑会への接近の契機となった。我々はおそれた「債権の争いなどないところへ学苑会が全立派共斗が行ってしまうのではないか」と、当時ノンセクトの代表的存在として有ったのが、サ連協、ペ平連であった。二者は当時六斗委を結成し明大の反乱をノンセクトを結集していった。だがそれは斗争の常ならざりでもが無媒介的に結合し、諸個人の意識化された中で思うままに政治を引き、「自然発生性の立場」を何によって行うのかと云う問題が、以前の「全立派運動の理念的願望」によじかれていた。それで表裏二面的でアント党派としての意識を無意識のうちに内包していったものとしてあったのである。そして前述したテロ行為によりそれは全面的に崩壊した。「斗争が我々の知らないところへ行ってしまう」。昨年に近づいてモリコを経験して来たノンセクトは自らのありのままの存在を主張する形で学苑会学生大会に登場したのである。

学生大会前未開のものとなってしまった。論争しても論争にならなかったが敗れた方4票差で勝った。そして不思議なことに勝った方がその為に消極だったのである。それとはウラハラに票を投じたノンセクト諸君がこの学苑会に期待を怠らざる所以である。ノンセクト学苑会執行部の苦悶の道はそこから開始されたのである。

「自治会とは何か」という問いには各個人は自己の思うままにその考え方を提出した。だがそれは所詮おしゃべりにすぎなかつた。そのことを悟った学友は行動して「どう考えようとは何かはない。要はやつてゆけばいいんだ」と、それは明らかに時代の影を引きずっていた。それは新左翼行動主義の全面崩壊としての全立派、ノンセクト運動の悪しき体質と言つても過言ではあるまい。そしてその様な運動は昨年11月の斗争で毫端に敗北していったのでありその総括は根柢的に行わば書くべきである。そしてその様な状況に我々は無意識の過程で規定されなければならないものとして斗争全ての人間にせまられていたのである。その様な状況に我々は無意識の過程で規定されていたのでありそれは他別学苑会にも反映したのである。ノンセクトはあとはよまの姿を、党派もあるがよまの姿を、自己の意識されない領域において表現し、学苑会運動がその学生大会を契機に過渡的状況に突入したのである。

過渡期に特有な現象は矛盾と混乱であろうそれは「党派争き戦斗的大衆、大衆争き党派」とか「ノンセクトであるにもかかわらずセクト的にならぬ者」とか、色々の言葉をもて語られてきた。この矛盾と混乱は一つの葛藤となって自治会を構成する成りは運動を担つて来た全ての人々の内には入り込んできている。しかしこの状況は我々がどうしてもぐらねばならぬ試練である。大学当局はこの様な我々の状態に付込み自治会分断解体策動を開始した。だが学友諸君はたゞえこの様な葛藤の中にありつつもこの様な状況を許さないであらう。我々は少くとも自己の運動を検証しつつ斗争の用意があることを宣言しておく。学苑会運動を担う全ての学友諸君、自己が今、どの地帯に居りかを再検討して欲しい。すでに刃は帝政主義的利害を資本すべく入管法の会議上程をたくらんでいます。しかし我々の戦列もその葛藤を共有しつつ強固なものとしてよみがえりつつある。華青斗諸君の問題提起はその試験なので、苦しいのは我々のみではない。それが眞の斗争なのであり現実なのだ。全ての学友諸君!! 政協争と共に前進しようではないか!

授業批判を開始せよ! 口シカアウト体制粉碎 学館解放 人格の商品化=試験粉碎
中教審大学粉碎!!

入管再上程阻止 「法的地位協定」粉碎

日帝の侵略・反革命体制=入管体制粉碎!!

政協委員会誌
「ムクロ」2号 近刊